

大草谷津田いきものの里 自然観察会

山笑う

山岸文子(千葉市)

日 時：2010年4月4日(日) 10時30分～12時 天候：曇り

参加者：大人15名 子ども2名

担当指導員：田井中信子 山岸文子

例年ならば10日程早く木々の芽吹きが始まる。今年は3月が寒かったせいで、今まさに「山笑う」のテーマどおりの状態になった。曇っていて4月とは思えない程の寒さの中、来場して下さった方々に感謝。

杉林脇の道路で「じゃんけんのチョコの形をした木を捜して下さい」と呼びかける。木の輪切を見せて説明。木の外側部分に導管、師管と呼ばれる水や養分の通り道があり、中央部が無くても木は生きていける。コナラは薪炭等に昔から里山で利用されてきた。切り株から沢山の芽が出るが2本だけを残して他を摘み取る。大草では「もやいがき」と呼ぶ摘芽の方法。2本だけ残した芽が今では大きな幹になり根元に洞が出来て見事なチョコに形になった。ずっと以前から通るたびに気になっていた木だった。もし私がウサギやネズミだったら絶対あの穴を探検に行くのに。

タチツボスマレやカントウタンポポが道端に彩を添える。

3月の観察会は雨で中止になった。本来ならば3月初めに藁の中の虫を調べる予定だった。昨秋巻いた菰を外して観察。クヌギカメムシの小さいのが歩いている。昨年12月に産卵を確認したものだ。

田のそばのベンチの後に樹液の出るコナラがある。ルリタテハを皆でワイワイ見る予定だった。何？この寒さは。チョウもハエも全く見当たらない。が、伝えねば。樹液を求めて昨秋はスズメバチ類が多数飛来した。「もし事故が起きては困る。この木を切ってしまうセメントで塞いで樹液を出なくしてしまえ。」という意見が少なからずある。切らせてなるものか。たった一本のこの木を頼りに生きている虫がどれだけ居るのか！オオムラサキやカブトムシを観察できる絶好の而も稀少な学びの場である。危険を予測できるからこそ予防もできる。樹液の出る木を見つけたら決して突進しない事。先ず少し離れた所からゆっくりまわり込んで見る事。チョウが翅を閉じている時は本当に判りづらいから。ハチが居るかも知れないから。危険なハチが居たら絶対に怒らせない事。来場者一人一人の僅かな注意と協力で事故は防げる。

田の畦にタネツケバナの白い花。タネツケとは種籾を水につける事。出発前に入口広場の倉庫で冷水浸漬を実際に見て貰ったので理解も早い。

田の西側斜面には昔はカタクリが咲いていたらしい。今は木が生い茂り日当たりも通風も悪いので1月に22本を伐採した。切ってみて初めて分かったがスギの幹にはコブ病が。コブは年々肥大し僅かな刺激で折れやすい。通路の上から枝が折れて落ちて来てはたまらない。切って良かった。コブ病はサビ病菌が原因で起きる。5月頃コブから胞子を出し、シラカシ、クヌギ等ドングリのできる木の葉にサビ病を発生させる。9月末に出る胞子は再びマツやスギの幹を侵す。切って良かった。結果的に衛生択伐という適切な森林管理の方法だったのだ。コブ病の枝を見せて説明。通路脇の丸太の上にヤニサンガメの仲間がいた。先月ならば藁の中に潜っている筈だった。捕まえようとする樹皮の下に隠れた。

大草の田作り森づくりのボランティアに関して5年目を迎える。この環境を次世代に繋げたいという思いで活動しているし、その活動内容を中心に案内した。今迄のガイドと違って参加者の自覚を促す言葉が多かったが十分に伝わったのであろうか。